

# あるむぜお 42

府中市郷土の森だより

al museo NO. 42

1997年12月20日



冬の使者・ジョウビタキ

## 園内歳時記

郷土の森の広大な敷地に植栽された樹々は、10年の歳月を経てさまざまな姿を見せてくれるようになりました。ケヤキをはじめ、クヌギ、クスノキ、シラカシ、マテバシイなど、10メートル以上の高木を主体として春夏秋冬、花を咲かせ、新緑に染まり、実をつけるという自然の営みが、当たり前のように行われています。

こうした環境の充実は、やがて色々な種類の昆虫の生活場として機能し始め、これに伴い飛来する野鳥の数も年毎に増えてきているようです。冬の寒さを感じる頃になれば、北方よりやって来る渡

り鳥の姿も、ごく自然な光景として目に映ります。

ジョウビタキは、冬鳥として全国的に渡って来る種類で、樹々の空間を利用して獲物を捕らえるタイプの鳥です。一般的には、敷地や農耕地、川原、林縁などに単独でおり、杭、石、屋根、電線等によくとまります。郷土の森でも、ウメの枝にとまる姿をよく見かけます。冬の薄暗いイメージを払拭させるほど、その体半分のオレンジ色が見事に映えています。こんな光景が楽しめるのも、郷土の森に、いわゆる良い環境が整ってきたからに他なりません。

これは、武蔵野のひとつの物語。

行く春を送り、やがて秋が来て、また春がやってくる。

奈良時代以来、武蔵国という大きな国があった。

その真ん中に、広大な台地が広がっている。「武蔵野」である。

都へ通じる大きな道が造られ、国府が置かれ、国分寺も建てられた。

武蔵国随一の都市ができあがったが、よけいに目立つ原野。

かつて、武蔵野は秋だった。

行けども行けども、果てしなく続く草原。

秋草がなびく、その向こうに、今しも月が上ろうとしている。

都の貴族たちは、見もしないで、武蔵野のイメージをとらえた。

たくさんの和歌に詠まれた歌枕の地。

「歌枕を見てまいれ」と言われて、東国に流された官人がいた。

「咎め無しで歌枕を見にいきたい」という話を聞いた文人もいた。

江戸時代の絵師たちは、繰り返し、薄がなびく武蔵野の絵を描いた。

武蔵野は、いつも秋のようである。



武蔵野

## 特別展

# 武蔵野の春

## 花の名所のなりたち

1998年3月1日(日)～3月29日(日)



そんな武蔵野に、ひとつの恋愛事件が起きる。

京都からやって来た、東下りの色男。身分は高い。

土地の娘と恋に落ち、娘を盗んで武蔵野に逃げ込んだのである。

武蔵野を追い駆ける国府の役人、松明の火で野原を焼き払おうとした。

「武蔵野は今日には焼きそ…」、必死で詠んだ男の歌がよかった。

二人は赦されたのである。

武蔵野の春の予感、この時にあった。

その後も武蔵野の開発は進む。

原野が開かれ、畑が作られ、屋敷も建ち始めた。

と思うと、何やらききな臭い気配。

馬に跨がった大軍が押し寄せ、鬨の音が天に響く。

武蔵野に戦死者の屍が墨々と重なることもあった。

たくさんの武士や僧や商人たちが、武蔵野を西へ北へ向かう。

ただ今、武蔵野の春、満開。

やがて、長い戦乱が収まり、武蔵野の東に巨大都市の建設が始まる。

大きな街道が武蔵野を横切る。宿場町も賑わう。

用水がひかれ、新田開発もどんどん進んだ。

江戸の町人も郊外の農民も、愛してやまない梅や桜の花。

武蔵野にも有名な花見の名所ができた。

「白雲に遊ぶがごとし…」、つかの間の春の夢を、今、楽しむ。



### □主な出品予定資料

武蔵野図屏風(江戸東京博物館蔵)

武蔵野図茶入れ・茶碗(北鎌倉美術館蔵)

伊勢物語絵巻(鉄心斎文庫蔵・大阪青山短期大学蔵)

金井観花図巻(小金井市教育委員会蔵)

谷文晁画 画学過眼図彙(大東急記念文庫蔵)

小林天淵画 梅図屏風(青梅市郷土博物館蔵) ほか

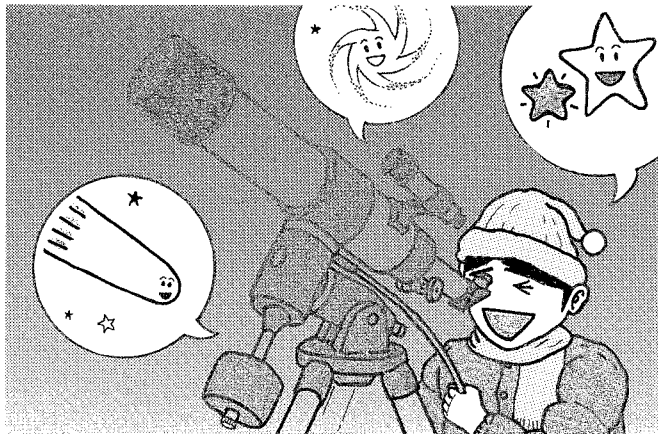
カットはいずれも本館所蔵資料より

(小野一之)

# 広い宇宙を 見つめる眼

～天体望遠鏡～

馬場 弘修



双眼鏡で星雲・星団などを見つけられるようになると「もっと詳しく観察してみたい」という気持ちが湧いてくるでしょう。今回は宇宙に踏み出す道具のひとつ、天体望遠鏡について紹介しましょう。

**1** 望遠鏡は、天体からの光を集める鏡筒とそれを動かす架台、さらにそれらを乗せる三脚などが組み合わされ、性能を発揮します。

鏡筒は光の集め方により数種類に大別できますが、その中でも凹面鏡を使う「反射式」とレンズを使う「屈折式」が代表的なものです。より暗い天体、より遠くにある天体を見たい時、多くの光を集められる大きな口径（鏡やレンズの直径）の鏡筒ほど観察の条件は有利になります。例えば、口径が2倍になると集められる光の量は4倍になるので、その分暗い天体まで見ることができるのです。また、同じ倍率にした時、口径の大きな方が細部まで見分けられる能力もっています。望遠鏡の仕組みがよく分からない人は、口径より倍率を気にするものですが、倍率をむやみに高くしても像がボケて暗くなり視野も狭くなってしまいますので、かえって見にくくなります。口径に合った適性倍率（口径が60ミリなら60倍までが適切ですが、月面や惑星だと120倍まで）で観察することが望ましいのです。望遠鏡の基本的な性能は、倍率よりも

口径の大きさが重要（屈折式ならレンズの素材も）なのです。鏡筒の選び方は観察する天体により変わってきます。基本的な構造は同じでも、月・惑星を高倍率で見る望遠鏡と、淡い星雲などを見るために広い視界を得られる望遠鏡では自から機能が違うのです。このため、一台で全ての条件を満足させてくれる望遠鏡は残念ながらありません。実際には「何をどのようなスタイルで観察するのか？」という目的に合っていることが、その人にとって使いやすい望遠鏡と言えるでしょう。

架台にもいくつかの種類があります。鏡筒を二つの軸で上下と水平に動かすだけの「経緯台」、軸の数は同じでも一度天体を視野に導入すれば、北極星に向けた軸を回すことで常にその天体を追尾する「赤道儀」などがあります。赤道儀の仕組みは、星が北極星を中心に動いて見えることを利用したものです。高倍率で月や惑星を観察するときには、視野が極端に狭くなるので、経緯台だと天体がすぐに視野から逃げてしまいます。このため、長時間同じ天体を観察する場合には、赤道儀が必要となるのです。最近ではほとんどの赤道儀がモーターを内蔵し、自動的に軸を回転させ追尾できるようになっています。

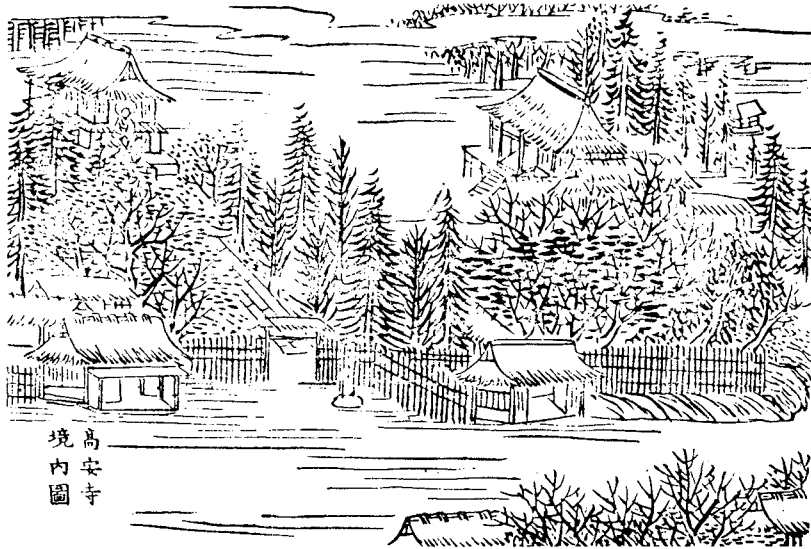
口径の大きな鏡筒や頑丈な架台は、その重量も相当なものです。これらを支える三脚（ピラーと呼ばれる円柱状の一脚もあります）も十分な強度がないと、鏡筒や架台の性能を活かすことができません。重みで三脚自体が歪んだり、風で振動してしまうようでは天体の細部を見分けることが難しくなってしまいます。

**2** 望遠鏡では、どのような天体が観察できるのでしょうか？一番身近な天体として、最初に「月」へ向けてみましょう。双眼鏡では分からなかったクレーターなどの細かい地形が手に取るように見えます。また、太陽系の惑星では「金星」の満ち欠けや「木星」の縞模様、「土星」のリングなども楽しむことができます。さらに双眼鏡で分離しなかった二重星が二つに分かれて見えたり、散開星団では見える星の数が格段に増え、星雲の形や濃淡も確かめられるでしょう。冬の星座の中には、いろいろな星雲・星団があるので、それぞれの形をスケッチし観察記録として残すこともできます。

肉眼より双眼鏡、そして望遠鏡の方が暗い天体まで見られます。つまり、より遠くまで見えるということになるのです。望遠鏡を使うことで、私たちの宇宙はどんどん広がっていきます。夜空に望遠鏡を向けた時には、宇宙の広大さも感じ取ってくださいね。

## 鎌倉公方と「武城」

深澤 靖幸



境高  
内安  
寺

『新編武蔵風土記稿』  
に描かれた江戸時代後  
期の高安寺  
総門の右手は土塁か。

学芸員Aは、あるむせお42号の締め切りが近づいているにもかかわらず、原稿が書けていない。テーマすらまだ決まらず、気持ちは焦るが、明日は連続講座「中世の武蔵府中」の担当日だ。そのレジュメも作らなければならない。とりあえずは、目先の準備をしようと、中世武蔵府中関係の史料をくくり始めた。しばらくすると、発掘調査報告書を引っ張り出したり…。レジュメ作りを忘れてしまったようだ。やがて、学芸員Bに話しかけた。

## ▼「武城」

A：ねえ、ちょっといいかな。

B：いいよ、なんだい。

A：南北朝時代の代表的な五山の文学僧で義堂周信ぎどうしゅうしんっているじゃない。彼の日記で『空華日用工夫略集』くうげにちようくふうりやくしゅうと  
いうのがあるんだけど、その中で〈府中〉が「武城」と書かれているんだ。

B：義堂周信？ ああ、夢窓疎石の弟子だったよね。「武城」は、武蔵国府・武蔵府中の城という意味かな。

A：そう思うだろ。南北朝時代は、全国的に「府中」の呼称が確立していく時期で、〈府中〉の場合も「武州府中」とか「武府」という表記が多いんだけど、「武城」と書いているのは今のところ義堂周信だけなんだ。

B：それで、どんな記事に出てくるんだい。

A：2か所あってね。1つめは、応安元年(1368)閏6月に平一揆を討伐した関東管領・上杉朝房が「武城」から鎌倉に帰った、という記事。2つめは、応安3年10

月に「武城」に在陣中の鎌倉公方・足利氏満あしかがうじみつに義堂周信ぎどうしゅうしんが謁見したという記事なんだ。

B：へえ、義堂周信が府中に来ているとは知らなかったな。彼は、氏満の父、基氏に招かれて鎌倉に来たんだよね。それはともかく、歴代の鎌倉公方は度々府中に来ているけど、常に片町にある高安寺こうあんじに陣を置くん  
だよね。

## ▼高安寺

A：うん。史料上で確実なのは、初代基氏を除いた二代氏満、三代満兼みつかね、四代持氏もちうじ、五代成氏しげうじだけど。義堂周信が氏満に謁見したのも、高安寺と考えるのが自然だろうな。鎌倉公方が高安寺に本陣を置いたのは14世紀の後半から15世紀の前半の間ということになるね。

『新編武蔵風土記稿』をはじめとする近世後期の地誌では、高安寺の周囲には空堀からぼりが巡らされていると書かれていてね。しかも、その空堀は鎌倉公方の陣所として使われた名残だとも指摘しているんだ。

B：すると、「武城」は高安寺を指しているのか？

A：うーん。周辺の開発が進んでいるから旧状を知るのは難しいけど、でも、高安寺は崖線がいせんの際に建っているだろ。南はすぐに崖だから空堀があったとはちょっと考えにくいね。西側も小さな谷が境内を画していて、これを空堀に見誤った可能性もあると思うんだ。『新編武蔵風土記稿』に載せられた高安寺の俯瞰図ふかんでもそれらしき堀は描かれていないしね。近世地誌の記述は、鎌倉公方の本陣という先入観が影響してい

るのかも知れないな。

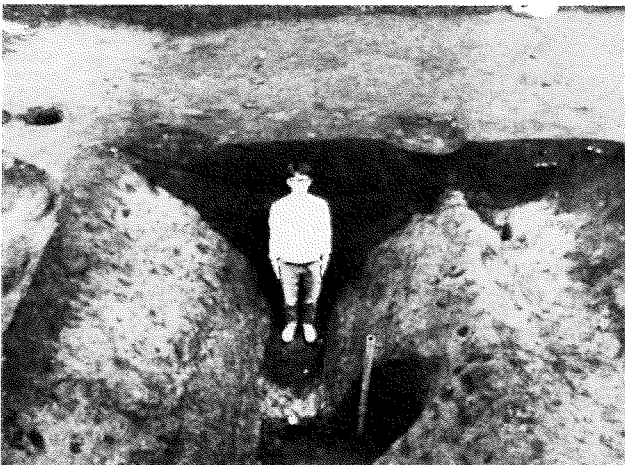
B：そうはいうけど、鎌倉公方の本陣としてかなり恒常的に使われているだろ。たしか、持氏は1年近く高安寺に滞在したこともあったよね。だからやっぱり、高安寺は城砦化されているんじゃないのかな。西側の谷に手を加えて堀として機能させた可能性は高いし、東側や北側については今後の発掘調査で発見されるかも知れないだろ。『新編武蔵風土記稿』の挿絵にしても、(旧)甲州街道に面している所は土塁のようにも見えるじゃないか。たしか、明治初期の地籍図でもそこはひと続きの長細い地割りになっていたはずだ。(旧)甲州街道に沿って土塁があったんじゃないのかな。

A：おいおい、待ってくれ。僕も高安寺が城砦化されていないなんて言うつもりはないよ。ただ、鎌倉公方が出陣するとなれば、相当数の軍勢と一緒に動くだろうし、(府中)に陣を置いたのも古代以来の伝統的な政治の中枢であり、鎌倉街道上道が多摩川を渡る交通上の要地で各地から軍勢を集めるのに適していたからだろ。そうだとすれば、広いとはいっても高安寺の境内は、城砦として、あまりにも狭いと思うんだ。

B：確かにそうだ。そうすると、高安寺を中心にもっと広い範囲が城砦化されていて、それこそ義堂周信のいう「武城」ということか。さては何か、腹案があるな。

### ▼ 薬研堀状の大溝

A：そんな大それたものじゃないけどね。市内の発掘調査で、薬研堀のような溝が点々と見つかっているんだ。最も大きいのは、新甲州街道の北側。5カ所で発掘されていて、その延長は280メートルにも達しているんだ。発掘した状況で、深さ1.8メートル、上幅3.5メートルもあるから、実際はもう少し深さも幅もあったはずだね。単なる土地の区画とは考えにくい規模だろ。宮西町4丁目、(旧)甲州街道の北側の裏通りにほぼ並行して見つかったものは、規模は少し小さいけど、50メートル離



れた2カ所で発掘されているんだよ。それから、けやき並木の西側では、南北方向のものも発掘されていたな。

B：それは知らなかった。薬研堀というのは、断面がV字形をしたやつだね。3本のうち2本は、高安寺の北方にあって、東西方向に延びているということか。だいたい並行しているから、二重に囲まれていることになるんだね。戦国時代の堀に比べれば小さいけど、確かに大きな溝だ。それで南北朝時代のものなの？

A：厳しい質問だね。南北方向の溝からは南北朝から室町時代の遺物が出土しているみたいなんだけど、東西方向の2本の溝では遺物が出土していないみたいだね。構築年代も廃絶した年代もわからないんだ。ただ、市内の発掘調査に永年携わっている荒井さんは、中世の遺構として紹介しているし、しかも、溝を埋めている土はいずれも南側から流れ込んでいると書いているんだ(荒井健治「武蔵国府における中世遺構の調査の現状」『府中市埋蔵文化財研究紀要』1号 1992年)。南側からの土砂の流入は、南側に土塁が築かれていたことを推測させてくれるだろ。

B：なるほど。溝だけでなく土塁もセットになっているとすると、軍事的色彩は濃いな。ようするに、これが「武城」の遺構じゃないのかということか。

A：うん。この溝が機能した時期を示す遺物が出土してくれないことには確かな答えは出せないけどね。でも、中世の(府中)で最も軍事的な機能を持ったのは、鎌倉公方の陣が置かれた時期だろ。まるで(府中)は、鎌倉府の出城だからね。「武城」の遺構は、間違いなく(府中)のまちに埋もれているんだよ。

### ▼ 府中の町と「武城」

B：ところで、発掘で見ついている薬研堀状の溝が「武城」の遺構だと仮定したなら、(府中)の町そのものがこの溝で囲まれるのかい？

A：またまた、厳しいところを突いてくるね。溝がどの程度延びているのか、かいても見当がつかないから、答えられないね、といたいところだけど……。現在見ついている範囲だけでもかなりの距離だから、(府中)の町全部とはいえないまでも、かなりの範囲を取り込んでいる可能性はありそうだね。

B：その内と外にはどんな違いがあったんだろう。

A：そう、それが問題だ。でも、ここから先は、もう空想の世界だよ。発掘調査の進展に期待するしかないね。

できた！Bさん、ありがとう。

新甲州街道の北側で見つかった大溝 (荒井 1992 より)

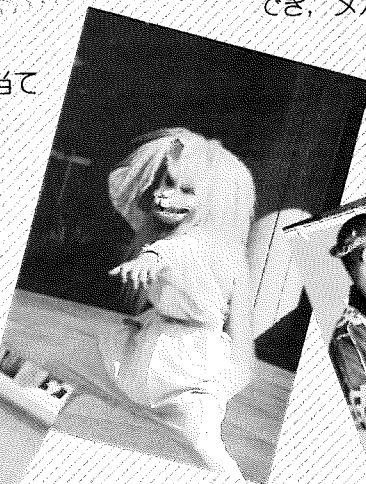
# が め ら と ~ き ん ぐ

郷土芸能と縁日の森で頑張った人々たち

10月10日から12日の3日間、秋の恒例行事“縁日の森”が行われました。今までに何度かこのコーナーでも紹介してきましたが、今回は視点を变えて、頑張ってくれた色々な人たちにスポットを当ててみました。

3日間で約2万人の入場者を数えた盛況ぶり。入口前には、早いうちから長蛇の列ができ、メガホン片手に入場整理する職員のりりしい姿もあちらこちらで見ることができました。

一体、何を魅力に人は集まってきたのでしょうか？ もちろん秋のさわやかな天候の下、縁日を楽しむことがその中心であったと思われそうですが、実際は様々な多摩の職人さんたちの実演に目を奪われ、郷土芸能の伝統的な響きに圧巻されたのではないのでしょうか。職人さんたち、大道芸のパフォーマンサーたち、囃子や国府太鼓の熱演者たち、皆がそれぞれ一生懸命に自身で伝えられるありったけの技術で、お客さんに文化を示したのです。伝統の技や、郷土芸能の奥行の深さに魅せられ、大いに盛り上がったのだと確信しています。

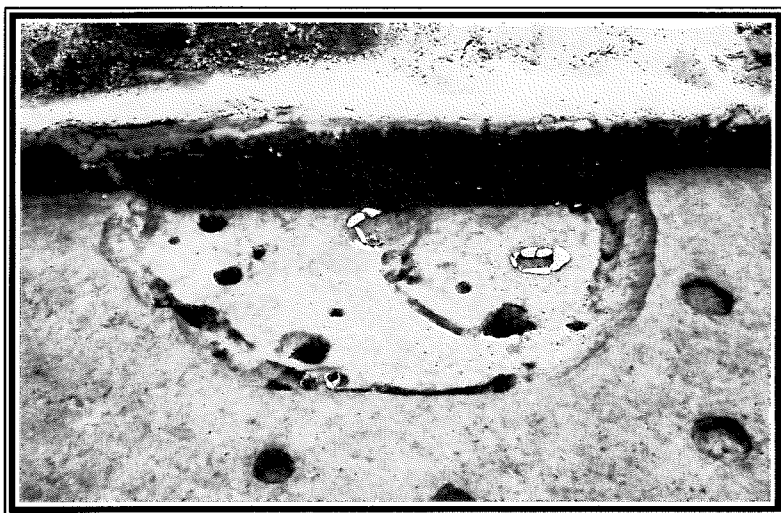


# 縄文時代中期の竪穴住居

白糸台6丁目アパート地区から

府中市遺跡調査会

野田 憲一郎



重なり合った縄文時代中期の竪穴住居跡

このところ比較的新しい時代の話が続きましたので、今回はぐっと昔にさかのぼって最近発見された5000～4000年前（縄文時代中期）の竪穴住居と集落についてお話したいと思います。

今回竪穴住居跡が発見された場所は、京王線武蔵野台駅と飛田給駅の間地点より南へ120<sup>メートル</sup>ほど下った府中<sup>ひいでん</sup>中<sup>ちゆう</sup>産<sup>さん</sup>線（ハケ）に近い場所でした。調査を始めた時から縄文時代中期の土器（加曾利E式）が大量に見つかり、当時の遺跡があったことが推測できました。発掘された2軒の竪穴住居跡もこの時期のものですが、重なり合っているため微妙に時期が違うようです。1軒は、東西6.2<sup>メートル</sup>、南北3.6<sup>メートル</sup>以上の大きさで、楕円形をしていました。屋根を支えた柱の穴が4つと、中央よりやや南寄りに石で囲い土器を埋め込んだ炉が残っていました。さらに、家族が増えたのででしょうか、住居自体を南側に増築していて、それに合わせて炉や入口の場所も変えていました。もう1軒は、この住居を壊して作られていました。その大きさは東西2.8<sup>メートル</sup>、南北2.2<sup>メートル</sup>以上と小さく、同じように真ん中に石で囲った炉を持っていました。その石は、古い住居のものと同様の石の質がよく似ていることから、抜き取って再利用したものと考えられます。重たい石をわざわざ河原から運んでくるのが重労働だったからでしょう。これら2軒の住居跡は、縄文時代中期の典型的な形をしています。この時期の住居跡は、すでに清水が丘や本宿町<sup>ほんしゆくぢやう</sup>で何軒か確認されていますが、白糸台地区では初めての発見でした。

さて、この中期は、縄文時代のなかで最も繁栄した時期だといわれています。多摩川流域においても中期の遺跡数は爆発的に増加しますが、低地を望む崖線沿いや沖積低地から入り込む谷の周辺に営まれています。それは、湧き水を中心に、豊かな環境に恵まれていたからです。

府中市内においても、多摩川に面した府中産線沿いに、上流から、本宿町遺跡、大國魂神社裏遺跡、清水が丘遺跡、そして調布市の飛田給遺跡へと、間隔をおいて分布しています。今回紹介した遺跡の場所は、清水が丘遺跡と飛田給遺跡の間に当たりますので、新発見の集落跡と考えることもできます。しかし、発掘調査した場所は全体のごく一部分で、集落の広がりはありませんし、清水が丘遺跡と飛田給遺跡の間といっても、飛田給遺跡に近接しています。ここに拠点を置く集落なのか、飛田給遺跡へと連続する集落なのかは今のところ何ともいえません。今後、周辺の調査が進むにつれ、必ずや集落の状況が明らかになることでしょう。



古い段階の住居跡の炉  
石で囲った中に土器を据えている。

## 郷土の森のアミューズメント

馬場 治子

最近流行の横文字の一つでアミューズメント性とかアミューズメントパークという言葉をよく目にします。辞書を引いてみると *amusemento* は *amuse* の名詞形で面白さ、楽しみ、慰み、遊び、娯楽などとなっています。郷土の森では開設以来、施設を紹介するときに“世代を越えて、楽しめる、憩える博物館”と言ってきましたから何かこの言葉にからむのでしょうか。

でも *amusemento park* の訳語は遊園地です。博物館と遊園地は少し印象が違います。

だがしかし '*amusemento*' の中には博物館 *museum* と同じ '*muse*' がいます。これは美や学芸の神ミュージーズ *Muse* に端を発する語で、動詞の *muse* は沈思熟考、よく考えることだそうです。やっぱりこの二つには大きな関係がありそうです。そういえば日本語の‘遊び’だって色々な意味を持っていますものね。

とすると、博物館である郷土の森でのアミューズメントとはどんなことになるでしょう？

郷土の森は敷地が広いこと、復原建物があること、それによって町の辻や農村などの風景ができていて、展示室だけを主とした博物館に比べずっと‘遊び’の要素を取入れた催しを種々行っています。

今年も10月に開催された、職人さんとの直の出会いや大道芸を目の当たりにできる‘縁日の森’、12月の‘餅つき’、毎月の民家のイロリ端での‘お話会’、毎週末のふるさと体験館での手作り教室、陶芸教室、等々、郷土の森で体験学習とか公演事業とか呼ん



でいるものの多くが‘楽しくやろう’に意味を措いています。

でもその‘楽しい’の後ろに何かが欲しいと思うところが遊園地と博物館の違いでしょうか。

例えばちょうど季節の餅つき大会、先ず材料の餅米が園内の田圃でこめっこクラブの子供達が育てたものです。その米作りについても種々こだわりがあるのですが、それはひとまずおいといて、餅米を蒸すのは、復原農家河内家の土間に据えられたへっつい(かまど)に火を焚き煙にいぶされながら蒸籠をかけます。蒸し上がったら筵を敷いた庭で臼と杵とで搗き上げます。搗きたてお餅にきなこや餡をまぶして、ああ美味しいとなって、当日の入園者に一皿ずつ試食して頂くのです。

ただ餅つきを楽しむだけなら、ガスで米を蒸したって構わないようなものですよね。そこを枝燃しからやってしまうところが郷土の森なのです。

この催しは春から米作りに携わったこめっこ達の収穫祭であると同時に、昔の暮らしの再現を目論んだ郷土の森の年中行事でもあります。前の時代の事を次の時代に伝えるのは、歴史民俗系博物館の仕事の大きな柱です。餅つき機で作った餅なら都会の家庭でも味わえる様に、古い事柄も変化した形でなら今の生活の中にも様々に伝わっています。昔の姿を出来る限り一から再現してみる、これが郷土の森での‘楽しい’の裏側にあることです。

餅つきのみならず、縄文土器を作る時は、地元の粘土を材料に用いる、お正月の凧も和紙と竹ひごから始める……。組み立てるだけのキットを使うのではなく、‘なぜ?’ ‘どうして?’ ‘どうしたら?’ の問いと向き合えるようにしたいのです。何でも出来上がった物がすぐ手に入る現在に‘そもそもどうだったのか’という原型が示せたらいいなと思うのです。

お餅の味見の一皿にはこんな意図が込められています。郷土の森で種々の‘楽しい’を体験された時、もうちょっと目を配ると‘もっと楽しい’が見つかることでしょう。